

日本福祉大学福祉社会開発研究所 『日本福祉大学研究紀要 - 現代と文化』
第 117 号 2008 年 3 月

シラーの『ヴィルヘルム・テル』について 1.

江 坂 哲 也

はじめに、影響史

シラー (Friedrich Schiller 1759-1805) の韻文劇には詩行数が付されている出版が最近多くなっているように思われるので、このタイトル作品からの引用には、その直後の () 内に詩行数を示した。これは後ろに注をつけるより紙数が節約でき、さらに読者が原文と照らし合わせながら読まれる際のご面倒を軽減しようとしたためであること、これをまずお断りしておきたい。

この劇 (Wilhelm Tell 1804) が世に送り出されると、これは広く世界の人々に文学として受容されただけでなく、それぞれの時代の政治的事件と深く結びついて実際の歴史に大きな影響を及ぼしてきた。これはスイスのオーストリアからの独立運動を素材に、そこに登場する弓の名人テルが子どもの頭に載せたリンゴを見事射抜き、さらに悪代官ゲスラーを狙撃し、それが独立達成への導火線となるという話であるが、これはヨーロッパから遠く離れた東洋の日本の自由民権運動にも影響を与え、アジアなどの植民地の独立運動を励まし、そしてこの作者シラーはそういう「自由の詩人」として世界的に受け容れられてきた。彼の祖国ドイツにおいては、1804 年 3 月 17 日ヴァイマル劇場で初演され、終局で幕が下りるまで何と 5 時間もかかったが、これまでの彼の劇作を超える大きな成功を収めた。

そしてその 2 年後、すなわちその詩人シラーの死後たった一年の 1806 年に、国内で最も強大な領邦国家であったプロイセン軍が皇帝ナポレオン (Napoleon Bonaparte 在位 1804-14/15) の率いるフランス侵略軍にイエーナの戦いで打ち破られるという大事件が起こる。この地の大学でその数年前まで哲学の教授であったフィヒテ (Johann G. Fichte 1762-1814, イエーナ大学教授在職 1794-99) は 1807 年からナポレオン軍占領下のベルリンで講演を重ね、それにたいして蜂起するよう訴えた。この内容は「ドイツ国民に告ぐ」(Reden an die Deutsche Nation) というタイトルで彼の著作に収められている。シラーもイエーナ大学教授 (1789-91) として歴史学を講義していた時期があった。その大学の愛国的学生たちはシラーの主人公テルを「自由の戦士」の模範とし¹、侵略者に立ち向かおうと軍服に着替えた。これを描いた大きな絵画がその

両教授が勤めたイエーナ大学の講堂に掛けられているが、このようにシラーのこの作品は現実の政治的問題と結びつけられることになる。

ナポレオンがロシア遠征に失敗し、1815年のワーテルローの戦いでイギリス・オランダ・プロイセンの連合軍に敗れ、セント・ヘレナ島に追放されると、旧体制に戻そうとするメッテルニヒ (Klemens W. von Metternich 1773-1859) の反動政治が1848年の3月革命まで続き、その下でそれに抵抗する市民的民主主義者もテルを同じように「自由の戦士」と見なした。前者はフランスによる侵略であるが、旧体制を革新する側面を持ち、後者はその革新を否定し旧体制に戻すもので、この両者はずいぶん違うと思われるが、同じようにテルは「自由の戦士」として評価されていたことになる。すると1789年に始まるフランス革命の進行を横目で見ながらシラーがこの劇を創作していた頃、ナポレオンの占領に抵抗していた時代、そしてドイツにも隣国フランスの二月革命が燃え移って来るまでの揺り戻しの期間、これら三つの時期の状況はずいぶん違うが、「自由」を叫ぶその劇作品は同じように熱狂的に迎え入れられたことになる。

ある時代区分での学生とか市民的民主主義者という階層と違って、個人的な評価は人それぞれである。ゲーテ (Johann W. von Goethe 1749-1832) は友人シラーから19日に完成したその劇の原稿を受け取ると、その2日後の1804年2月21日付で「作品は素晴らしいできれば、私の夕べを美しいものにしてくれました」²と読後感をシラーに書き送り、ただちにそれを彼が管理を任されているヴァイマル宮廷劇場で上演するよう手配し、3月17日の初演にこぎつけている。彼は自分のスイス旅行の体験談がこのような芸術作品に昇華されたことに満足の意を表していると言えよう。ヴェルネ (Ludwig Börne 1786-1837) は1828年「シラーのドラマにおけるヴィルヘルム・テルの性格について」(Über den Charakter des Wilhelm Tell in Schillers Drama) と題するエッセイで、その主人公を「俗物」で「小市民」と罵倒し、彼の舞台上での行為と台詞に逐一批判をくわえている³。ビスマルク (Otto von Bismark 1815-98) は青年時代にこのシラーの作品に接したときの感想をこう書いている。「私が歴史上のことで抱く共感はいつも権威者の側にあった。私の子どもらしい正義感からすれば、ハルモーディウスとアリストギートン、ブルータスも同じように犯罪者で、テルは謀反人で殺人犯であった」⁴。友情で結ばれたハルモーディウスとアリストギートンは僭主ペイストラトスの息子を殺した古代ギリシアの自由の英雄で、もう一人はカエサルが皇帝になるのを阻止するために殺し、古代ローマの共和制を守ろうとした闘士であるが、ヴィルヘルム一世に仕えることになるビスマルクにとって、上位者にそういう仕打ちをするものは滅ぼされて当然で、テルもそうなるべきであったということであろう。しかし、このテルはシラーの主人公としては珍しく、劇中で死を迎えることもなく幕が下ろされる。そしてその舞台上だけでなく、その後の時代でも生き続け、現在でも劇場に多くの観客を集め⁵、ドイツの書店の本棚ではもちろん、世界中で確かな位置を占めている。

20世紀の前半で特にこの作品が政治的に利用されたのは作者の祖国ドイツでであった。国家社会主義 (Nationalsozialismus) 政党⁶の代表ヒトラー (Adolf Hitler 1889-30. 4. 1945) は『わが闘争』(Mein Kampf) の第1巻を1925年に、そして翌年その第2巻を出版した。彼はその第

2 巻第 8 章の表題をテルの台詞、「強い者は一人でいるときが、もっとも強いのだ」(第 437 詩行——以下、『テル』からの引用は詩行数のみを表す)という言葉で飾っている。この章の内容は弱者が強者に淘汰されるのは自然であるという生物学の一説を利用し、このナチ党が他の組合や党などあらゆる集団を倒し、独裁体制を築くことの必然性を説いている。そのため、表題に利用されたあの台詞の直前にある「弱い者でも組めば、強くなる」(436) という台詞は、「弱いグループを集めることによって強力な要素が生ずるにちがいないという意見は正しくない」⁷ と一蹴され、さらにヒトラーはこれを映画化し、ドイツとスイスの共同制作で「ブラウン」色の強い『ヴィルヘルム・テル』を作成した⁸。つまりテルの英雄性を強め、ヒトラーをその彼に重ね合わせ、強い指導者である総統の命令につき従うドイツ国民という関係作りに利用しようとしたのである。

ところで、この主人公テルは一般的には模範的英雄として扱われてきたが、このナチスの時代だけでも様々な解釈と評価に分かれていた。そして最後には突然上から禁止されることになる。ルッペルト (Georg Ruppelt) は第一次の資料を駆使して、このナチス時代の文化政策の推移を「ドイツ・シラー協会年鑑」の第 20 巻に発表しているが、まず 1935 年の教育界での評価をシュタルクから次ぎのように引用している。「国語の授業でシラーの『テル』は、上級学校においてはほぼ第一のドラマとして、国民学校でも時々唯一のものとして扱われてきた。すべてのシラー作品の中でもっとも有名なこの愛国的な作品に、授業で、今日でも、このように特別な地位が認められているのは、それがドイツの根源的な力を放射し、その力が生徒のなかで詩的に形成された民族性に火をつけ、メラメラと燃え上がらせるからである。……テルは過去でもそうであったように、今日では我々が民族と共に第三帝国に入っていく。すなわち今日の劇場で、彼は国家社会主義共同体 (NSG⁹) 構成員の千人、いや何千人をも歓喜させ、彼らが国家に強い信条告白をする力になってくれる。そして彼は同様に今日の我々が就学中の少年少女を純粋で民族的な炎で満たしてくれる」¹⁰。この文からは、いかにシラーのこの作品をナチスが解釈し、利用しようとしていたかが明らかになる。すなわち民族主義的に解釈され、さらに排他的なものに歪曲され、国家主義的に利用されることになる。

ルッペルトはさらに、この『テル』はドイツの劇場で 1941 年まで最も好んで上演された作品であったというピッチの研究を紹介している。さらに彼は 1934 年のカール・デイトリッヒ・カールスの報告を紹介して、この劇を演出する際に、アードルフ・ヒトラーと国家社会主義への「権力移譲」を暗示させようとする試みまでもあったことを明らかにしている。この「権力移譲」は、ヒンデンブルク (Hindenburg 1847-1934) 大統領からヒトラーへのそのことである。すなわち前者はためらいながらも後者を 1933 年 1 月 30 日首相に任命し、さらに同年 2 月 28 日に「国民と国家を守るための命令」(Verordnung zum Schutz von Volk und Staat) に、そして 3 月 24 日にはその法を執行する権力を国会、すなわちヒトラーに授けるという「授權法」(Ermächtigungsgesetz) に署名したことを表している。

ナチスはこのように『テル』を積極的に利用しようとしたが、その同じ組織内で逆に反対する意見もあった。その 1934 年と 38 年に出版された二つの例をルッペルトはこうまとめている。

「シラーが完成させたこの最後のドラマを」等制 (Gleichschaltung¹¹, 新体制に合うように——引用者) しようとする努力にこう反対する意見があった。テルは使いものにならない、それどころか有害である。なぜならこの主人公は個人主義的な行動をとるから、これでは總統と国民との共同体という国家社会主義の理想とはとても一致できない。さらにこの作品で賛美されているのは帝国同盟からのスイスの解放であって、これは新しいドイツ的帝国思想と矛盾する¹²。この後者の反対意見は次のような歴史を背景にしている。プロイセンのフィリップ一世とその彼に仕えるピスマルクが主導して達成した 1871 年のドイツ統一は小ドイツ主義によるもので、同じドイツ語圏であるオーストリアとスイスの北部などは含まれていなかった。しかしナチスのめざす第三帝国は、それらをも含む大ドイツ主義である。それなのにその両国が戦い、スイスがオーストリアを追い出すという独立戦争を称えるシラーの『テル』は、それが 600 年以上前の歴史であったとはいえ、明らかにナチスの理想と矛盾するというわけである。ところで『テル』に対する前者の反対意見、すなわち主人公は個人主義的で全体と一致していないという見解、これは私がこの論文で取り上げようとする問題と関係するが、これについては後述することとして、ここではこの作品の影響史を続けたい。

ルッペルトによれば、国民への啓蒙と宣伝を担当する大臣ゲッベルス (Paul J. Goebbels 1897-1945) は 1936 年 10 月 17 日ベルント部長を送り、これら二つの反対意見を意識してか、こう基調報告させている。「最近の流行は前世紀の歴史を 1936 年の物差しではかり、(中略——引用者、以下同じ) 過去の偉大なドイツ男子の創作を国家社会主義の世界観の枠内にはめ込むことができるかどうかと盛んにやっている。偉大なドイツ的過去に、これは国家社会主義的ではないと非難を浴びせることに意味はない。(中略) その馬鹿げた良い例はドレーズデン近郊ヘレラウのトーマス・ヴェステリッヒ劇場で、シラーの『テル』は良くてもせいぜいスイス的で、国家社会主義的ではないとして、その上演プログラムから外したことだ¹³。ヒトラーとその彼に仕えるナチスの首脳たちの目には、シラーの作品は十分利用できるのに、狭量な者たちはその価値を知らずに排除している、そう映ったのであろう。

ところがその 5 年後にゲッベルスはヒトラーの命令により、劇場での上演と教育界での利用を禁止するようという通達¹⁴を受け、『テル』はナチス支配の終焉まで完全に排除されることになる。しかし、その理由は明らかにされていない。その禁止理由を憶測したものには、『テル』は現体制をくつがえす革命の導火線になりうるなどといものもあるが、これに対してルッペルトは、戦況はドイツにとって良好であったこと、そして当時の社会的状況からそれは考えられないと反駁し、ヒトラーの暗殺恐怖説を提示し、その根拠の一つとして、その当人の「よりもよってシラーがスイスの狙撃者を賛美してしまったとは」という言葉を引いている¹⁵。確かにこの見方にはうなずけよう。ヒトラーはナチス党内での権力闘争、共産党など他党への暴力的攻撃、そして権力獲得後は他党のすべてを非合法化し、反対する者は肅清するなど、食うか食われるかの「弱肉強食」の網をくぐってきたのだから、彼が逆に暗殺の対象となるのではという恐怖に囚われていたということは考えられよう。しかし、そのヒトラーの言葉は 1942 年 2 月 4 日のもので、

最初の禁止命令が出された 41 年 6 月 3 日より 8 ヶ月も後である。もちろん、それ以前にもそのように彼が吐露した言葉があったであろうが、彼の側近や部下に書き留められなかった、またはそれが戦禍で無くなってしまったということもあろう。しかし、テルのゲスラー狙撃は重要場面であっても、全体の一部でしかないこと、これも忘れてはならない。

その 3 年前の 1938 年にナチス・ドイツの軍隊は同じドイツ語圏とはいえ他国であるオーストリアに侵入し、それを併合し、1939 年 8 月 23 日にはソ連と不可侵条約を結び、その数日後の 9 月 1 日には異言語圏のポーランドに侵略を開始した。この事件により二日後にはイギリスとフランスがドイツに宣戦布告し、ヨーロッパでの第二次世界大戦は始まっていた。ところで、ナチスが急速に勢力を伸ばした一つの原因は、ドイツにとって過酷な 1919 年の戦後処理にあった。ヒトラーはそれを象徴するベルサイユ体制を盛んに攻撃することによって、1929 年のウォール街での株暴落に始まる世界恐慌で没落した中産階級の民族主義的感情に火をつけ、それを自党に引きつけた。それを良く物語っているのがその年を挟んだ選挙結果である。1928 年 5 月の国会議員選挙でナチスは 2.6% の得票率に過ぎなかったが、30 年 9 月では 18.3%、32 年 7 月には 37.4% を獲得し、第一党にと急成長した。その後、世界で最も民主的といわれたヴァイマル憲法を停止し、独裁体制を築き、前述の戦争へと突き進んでいくことになるが、ここでそれについての詳述はひかえたい。しかし、少なくとも 1939 年のあの日までヒトラーはシラーのテルを味方につけておけたと言えようが、その後はスイス国民の敵である侵略者ゲスラーの役を演ずることになってしまった。ヒトラーの『テル』禁止命令の理由を考える際には、この点も考慮しなければならないだろう。ナチスが推奨したその劇を学校で習い、劇場で感動しながら見た兵士たちはポーランド、ソ連、そしてフランスなどに侵攻させられ、まさにゲスラーの家来になってしまった自分をどう思ったであろうか。

そういう個人的な胸の内での『テル』解釈はともかくとして、42 年までドイツは軍事的戦勝につぐ戦勝に沸き上がり、それまであちこちにあった共産・社会主義、伝統的保守派、キリスト教関係者のナチスに対する抵抗運動は退潮せざるをえなかったが、その後のスターリングラードを巡る攻防戦に象徴されるような戦線硬直と敗退により、いくつかの反ヒトラーの運動が息を吹き返し、または新しく生まれてくる。その代表はミュンヘン大学の学生ショル兄妹 (Hans 1918-1943 u. Sophie Scholl 1921-1943) たちの「白バラ」グループの反戦運動や、軍隊中枢のシュタウフェンベルク (C. Schenk von Stauffenberg 1907-44) らのヒトラー暗殺計画と実行である。彼らの運動や計画の実行はすべて失敗に終わり、逮捕され、処刑されてしまったことはその死亡年が表している。結局ナチスの支配に終止符を打ったのは連合国の軍事力で、1945 年 5 月 8 日ドイツの無条件降伏でヨーロッパでの第二次世界大戦は終わった。その後に残ったのは千万単位の死者と破壊され尽くされた瓦礫の山で、まさに「ヨーロッパは戦い尽くした」¹⁶⁾ のであり、それまでの復讐主義の原因を作らないようにと、ヨーロッパの西側では産業を支えるエネルギーである石炭や鉄鋼などを狭い民族主義的な利益で奪い合わないようにと共同体化が進み、現在では共同通貨オイロ (Euro, 英語の発音ではユーロ) が導入され、その圏内では憲法まで共同化され

ようとしている。

ドイツの地の東側は、1949 年に創設された西側の NATO に対抗して、ソ連を盟主とする 1955 年のワルシャワ条約機構に組み込まれた。両ドイツとも終戦直後は「統一」を意識していたであろうが、米ソ、または社会主義と資本主義の東西対立により、スイスの三州のように「統一」して新しい国を造るという『テル』の世界は文学と舞台の上にとどめられた。その後 DDR（ドイツ民主共和国の略号）では西側からの経済的攻撃¹⁷を防ぐために 1961 年のベルリンの壁が作られたが、それは同時に社会主義的計画経済の支柱である国民が西側に逃亡する¹⁸のを防止するものであった。東には西側の自由な空気と経済発展を西方から来る電波のテレビ番組で知り、それにあこがれながら二流のドイツ人と見なされている我が身を悲しむ若者が多数いた。その琴線に触れるおそれのあるルーデントの次のような台詞が『テル』の第 2 幕第 1 場にあった。この台詞のためだけではないが¹⁹、この劇はベルリンの壁が崩壊する直前まで上演許可されなかった²⁰。

隠さずに申し上げましょう。他州のやつらは
私たちを百姓貴族と罵っているのです。この罵倒が
私の心の奥底にまで、グサリと来るのです。 825
やつら貴族の若者が、ハーブスブルク家の
旗の下に駆け集まり、名誉に浴しているのに、
この私は先祖伝来の、この田舎で
無為にジッと我慢し、毎日同じ卑しい仕事に縛られ、
人生の春を失っているなんて、もう耐えられません。 830
あちらでは皆がみな、活躍に活躍を重ね、
この山々の向こうには、名声の世界が輝いているのです。

このように『テル』の様々な時代での影響史を見てくると、シラーが創作した時代にこの劇を一度戻してみようという試みもあながち無駄ではなく、さらに「過去に目を閉じる者は、現在にも盲目になる」²¹というヴァイツゼッカーの言葉がここでも当てはまるように思われる。

シラーの『テル』創作の立場とは？

ヘルムート・ブランド（Helmut Brandt）は「生き続けているシラー」と題した講演を残している。そこで彼はアルフォンス・グリュックの批判を受け入れ、初期 DDR の研究を克服し、後期のシラーをこれまでの「国民詩人」としてではなく、「世界市民」として位置づけるべきだと呼びかけている²²。そして、グリュックがそう指摘するだけで止めてしまったその奥の問題に彼は入っていく。では「なぜシラーにとって国民的な素材が『ヴァレンシュタイン』（Wallenstein 1799）以後、初期の作品とは違って、実際にそのような（世界市民的な——引用

者) 意味合いを持つようになるのかという事実の説明はありません」として、こう続けている。「実際の事情はおそらく、(中略——引用者、以下同) 国民を解放する戦争は決して人類の利益に反して行われてはいけないということでしょう。人民の当然の利益に役立つ時にのみ、そして人間らしい目標を実現する過程にある時にのみ、その戦争は肯定される。これがシラーの歴史的立場です。『オルレアンの乙女』(Jungfrau von Orleans 1801) と『ヴィルヘルム・テル』は歴史のできごとの反映であり、そして彼の同時代人がドイツで国民的問題について、激しく議論していたことの反映です。(中略) その後フランス国民はドイツを最も脅かす隣人でしたし、次の世代ではもう>不倶戴天の敵<となりました」²³。

彼が短くまとめた「その後」の経過については、私なりに「影響史」として前述した。彼の問題提起は、スイス三州の「国民」または民族的な「歴史的出来事の反映」という素材をシラーはどうして「世界市民」の観点から『テル』という作品を創作するに至ったかということで、それに対する彼の回答はシラーの「同時代人がドイツで国民的問題について、激しく議論していたことの反映」となる。その「時代」は啓蒙主義のそれであり、「同時代人」はヴァイマルに集まっていたゲーテ、ヘルダー (Johann G. von Herder 1744-1803)、ヴィーラント (Christoph M. Wieland 1733-1813) などの文化人と、その彼らを訪れるフォス (Johann H. Voß 1751-1826)、スタール (Germaine de Staël 1766-1817) 夫人らで、「国民的問題」はドイツ国内のそれと隣国フランスの革命の推移である。これらが『テル』に反映されている、ということである。このテルにしても、ヴァイマルでテーブルを囲んだ団欒のなかで始まり、終わったといえよう。まずゲーテのスイス旅行談披露で始まり、最初はゲーテがそのテルを叙事詩にしようかという考えもあったが、彼がそれをしないうちに、シラーがそれを創作しているという噂がたち、最後にはそれがシラーにより『テル』という作品に結実化されたのである²⁴。

さらに、プラントはこう続けている。「まさにこれが古典主義作家シラーの立場であり、国民的な問題にたいするその世界市民的な見方であるのです。すなわち、そういう立場からシラーは文学の模範的な理解を求めているのですし、その劇の台本をとおして私たちにあらゆる国家主義的な感情輸入を否んでいるのです。それだけに、その後の歪曲は驚くべきことで、それは偉大な芸術でさえ、いかに悪用されるかということだけでなく、それ以上に、そういう芸術はそれを守る戦闘的代理人をいかに必要しているかということの証明でもあります。その代理人は同時にその作品の中で、そして作品とともに、私たちの人間らしさをも守らねばなりません」²⁵。

彼と同じようにノルベルト・エラス (Norbert Oellers) もこう書いている。「シラーの政治的濫用は大変ゆゆしき誘導効果を来しました。(中略——引用者) すでに 1933 年以前に『ヒトラーの戦友シラー』という本があらわれました。ところが、第三帝国において権力者たちも、劇場でシラーの自由のスローガンが惹き起こした拍手喝采の嵐に襲われたということ、これは今世紀でこの詩人から出たもっとも喜ばしい成果のひとつとして言及しないわけにはいきません²⁶。シラーの死後四半世紀ほどで、彼の一生と作品の熱心な学問的研究が始まりました。巨大な記念像が、じつに奇妙に歪められて、その文学から作られうるのです。将来においても、新しい歪曲

が、そしてその訂正が続くことでしょう」²⁷。

この二人の研究者はシラーの民族主義的解釈とナチス的歪曲を批判し、それとの戦いの必要性を訴えている。この過去を訂正し克服しようとする姿勢が文学研究だけに止まらず、政治や経済などの分野にまで及んでいることは、オイロの導入とあのヴァイツゼッカー大統領の演説にあった警告の言葉²⁸がよく表していよう。では、シラーが『テル』を創作していた時代とそれに対する彼の立場とはどういうものであったのだろうか。

ルター (Martin Luther 1483-1546) の宗教改革により、ローマ・カトリック教会を仲介としない神と個人との直接的関係が重視され、それをラテン語の読めない庶民にまで可能にしたのが彼による聖書のドイツ語訳であり、さらにグーテンベルクの活版印刷機が大量で安価なその普及を可能にした。これは教会などの世俗権力への従属から人間を個人として解放することを意味していた。さらにこれを哲学の分野で進めたのがカント (Immanuel Kant 1724-1804) で、彼は『実践理性批判』 (Kritik der praktischen Vernunft 1788) において厳格で自律的な義務の倫理学を確立し、「汝の意志の格率がいつも同時に普遍的立法と見なされるように行為せよ」という定言的命令を要請した。後述するように、実際にはそのような命令に従うことは不可能であろうが、この自らの意志で当然為すべしという「当為」 (Sollen) は「人間は強制されてはならない」 (Kein Mensch muß müssen)²⁹というレッシング (Gotthold Ephraim Lessing 1729-81) の言葉に通ずる。世俗的な利益も死後の天国も考えず、「善であるゆえに善を成せ」ということは、まさに個人の自由と自律への究極的要請である。シラーは著書を通してこの二人の啓蒙主義の先覚者に学んでいたものであり、この精神を受け継いでいる。

これを良く表している場面が『テル』にも出てくる。第3幕第1場で、子どものヴァルターが弓の稽古をしていると、弦が切れてしまい、父であるテルに直してくれるよう頼むが、それに対してテルは「だめだよ。ちゃんとした獵師は自分で何とかするものだ」と、他人に頼らず自立させるよう仕向ける。アルトドルフに住んでいるお祖父さんを訪ねる道すがら、父とその子がかわすその第3場での会話もそうである。ヴァルターは子どもらしい好奇心から、雪崩の脅威にさらされていることは違う国があるのかと尋ねる。テルはそれに対して、この山から下りて行くと平野の国があり、そこの川沿いには沃野が広がり、穀物が育っていて、その国は庭のように見えるんだよと答え、こう続く。

ヴァルター：じゃあ、父ちゃん、どうしてぼくらは 1795

すぐにその美しい国に下りていけないんだい。

ここで怖がり、苦労したりしている代わりにさ。

テル： その国は天国のように美しくって、恵まれてはいるが、

そこを耕している人々はな、自分たちで植えた

豊かな恵みを味わえないんだよ。

1800

ヴァルター：その人たちは自分たちの先祖の土地に、

父ちゃんのように自由に (frei) 住んでいないの。

テル： その畑は司教や王様のものなんだよ。

ヴァルター： でも森の中では自由に (frei) 狩ができるんだろう。

テル： その主人のものなんだ、獣も鳥もな。

ヴァルター： でも川では自由に (frei) 魚をとってもいいんだろう。 1805

テル： 川も、海も、塩も王様のものなんだ。

ヴァルター： みんなが恐れるそんな王様って、いったい誰なの。

テル： みんなを守って養ってくださる、ただ一人のお方なんだよ。

ヴァルター： みんなは勇気を出して、自分たちで守り合えないの。

テル： そこでは隣どうして、信用し合っていないんだ。 1810

ヴァルター： 父ちゃん、広い国でも、それじゃあ、ぼくには
狭っ苦しいよ。雪崩の下で住んでるほうが好きだな。

テル： そうだよ、坊や。後ろに氷河の山を抱えているほうが
悪い人間にいられるより、ずっと良いんだよ。

ここでは原文の > frei < を「自由に」と訳したが、もちろんこれは「無料で、ただで」の意味で、人々は領主の許可を得て収穫し、そこから一定の量を払うという農奴制が子どもにも分かるように、批判的に描写されている。もちろんシラーには 19 世紀中葉の「階級」などの観念はないが、実に現実をリアールに描き出している。国王を「みんなを守って」くださる唯一の方というのは、他国からの侵略から領民を守り、領民同士の争いを裁き、調停する至高の権力者ということである。それには領けるが、次の「養ってくださる」というのには疑問が残ろう。彼の所有地から上がる穀物などを下さるのだから、そういう表現にしているのだろうが、農民や猟師の労働を抜きにしては、その生産物はありえないのだから、それは「搾取」であるか、または百歩譲っても、「養い、養われている」という相互関係であろう。こう考えると、テルにシラーはジョークを語らせているのではとも思われる。とにかくこれは他国のことで、テルの家族が住む山には厳しい自然の脅威はあるが、領主に頭を下げなければならないような関係はなく、信用できない悪い隣人もいない理想郷である。

啓蒙主義の時代では、国王などの権力に反抗し、革命などを起こすことが許されるかどうかという問題をホッブス (Thomas Hobbes 1588-1679)、ルソー (Jean-Jacques Rousseau 1712-1778) そしてカントらは盛んに扱っていた。ホッブスは『リヴァイアサン』(Leviathan 1651) で、「万人による万人に対する闘争」を止めるため、超人的で理性的な国家原理による支配としての絶対君主制を擁護したが、その権力がもはや秩序を保障できない場合のみ国民に抵抗権を認めていた。このように彼は、人間というものは個人としては本来争いあうものだという点から出発し、それを抑えるための権力として国家を考えただが、ルソーは逆に本来の人間は真・善・美であるはずだが、そうでない現実にするのは社会制度であるとして、王侯・貴族の人工的社交

界に対して「自然人」を対置し、その人間が本来持っている「自然権」を盾にして、『人間不平等起源論』（Le Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes 1754）などでその旧体制を批判した。『社会契約論』（Du Contrat social, ou principes du droit politique 1762）では、現実のその絶対王政後に理想的国を創造するためには、その「自然権」を自ら放棄して「一般意思」に従い、政治的に大人である「市民」になることを説いている。そしてドイツのカントは最高の権威に革命を挑むことには、それがどのようなものであれ国事犯とみなし、それを批判的に捉えていた。

この時代は人間を個人として捉え、偏見や誤謬そして誤った権威から解放することによって人間社会は進歩すると考える啓蒙主義の影響下にあった。それゆえルソーは『エミール』（Émile ou de l'éducation 1762）で「自然に帰れ」という教育論を書いている。シラーも『人間の美的教育論』（Über die ästhetische Erziehung des Menschen 1795）で、演劇による教育の必要性を説いているが、それは 1791 年からシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン・アウグステンブルクの皇太子フリードリッヒ・クリスティアン（Friedrich Christian）に書き送った一連の手紙がもとになっている。それゆえこの啓蒙の対象は庶民だけでなく国王にまで及んでいたものであり、前述のカントの著書も人間としての行動規範を説いたもので、その頂点にあったのがフリードリッヒ二世という「啓蒙君主」なのだから、その君主も彼の著書を読んで啓蒙すれば良いのであって、それを打倒するなどということは彼にとって問題外の国事犯となるのであろう。それゆえ極論すれば、この時代の社会は種々な個々の人間の単なる集団であったが、そういう人間から独立した「社会」とか「階級」という概念はシラーの死後になってようやくマルクス（Karl H. Marx 1818-83）などによって確立されるのである。この時代は宗教改革により中世の教会のいう「神」から自立して、神と個人的に対面するのであり、学問や教育は既成のものをすべて疑い真理を探究し、偏見や誤謬から人間を解放し、個々人は自由で平等である人間としての生き方と倫理を模索し、自らの理想に向かって自己成長することが要請されていたのである。ところがその後、教会という世俗の神に代わって再び個人は自由ではなく、社会制度と出自の階級によって規定され、さらに次の世紀では「民族国家」に編入され、二回もの世界大戦に巻き込まれることになる。それゆえシラーの『テル』は、その後の民族主義にもナチスの国家主義とは無縁のものであったが、現在に生きる私たちは過去のその時代に生きたシラーの『テル』をどう受け取り、どう受け継ぐべきなのだろうか。

閑話休題として、『テル』のあの場面に戻ろう。テルはそこで子どもに自立するよう啓蒙主義の教育をしている。そして、ヴァルターは人の頭にはなく、竿に掛けられている帽子を見つけ、その珍奇な発見を父テルに知らせる。この帽子はオーストリア皇帝のもので、スイスを支配するために派遣された代官ゲスラーが、人民にその外国の支配を受け入れ、その支配者を崇めるようにしつらえた物で、その前を通る者はそれにお辞儀しなければならず、違反者は「身体と財産の没収」（400）に処するという代物である。これは啓蒙主義の精神に反し、自立した個人に対する侮辱である。代官のその命令に従わない者を捕らえるように配置された帽子の番人でさえ、こん

な物は「案山子」(1736)で、「まっとうな人間」(1739)は回り道をしてでも避けると、自分たちの馬鹿げた任務を自嘲している。それゆえテルは子どもが自立するよう教育すべき父として、「そんな物、どうでもよい。さあ、行こう」(1816)と、独立・自律の精神で背筋をまっすぐ伸ばし³⁰、通り過ぎようとする。そして番兵にその咎を受け、テルは子ヴァルターの頭上のリングを射なければならなくなることに繋がって行く。

シラーがこの『テル』の草稿を練り上げたのは1803年7月であり、それを劇として完成させたのは1804年の2月である。その5年ほど前に隣国のフランスでは封建制度を転覆させる市民による大革命が起こっていた。シラーはドイツの多くの知識人と同様に、それが新しい理想の時代の始まりとして歓迎した。その進行を彼は興味深く見ていたが、国王処刑のニュースには驚き、ジャコバン党が反対党を暴力的に抹殺・排除するようになると、同じ「国民」(フランス語ではcitoyen、ドイツ語ではBürger)同士が殺しあう革命には疑念を抱くようになる。当時のドイツは何百もの領邦国家に分かれ、さらに隣国のように革命を起こす力は市民になかったが、封建的身分制の撤廃や民族の国家的統一などという革新すべき課題はあった。それゆえこの『テル』には、作者シラーの隣国の革命に対する評価と自国で革新すべき課題が盛り込まれることになる。但し、場はドイツではなく外国のスイスに、時は1804年から14世紀初頭に移され、政治的にはドイツ統一ではなくスイス独立の運動になっているから、詩人としての自由と安全が確保されることになろう。

まずフランス革命の評価については、もちろんこの作品が自ら語っているのだが、ここで『テル』に添えてシラーがダールベルク(Carl Theodor von Dalberg 1744-1817)に献じた詩を見よう。

荒あらし勢力ふたつに敵対し
 盲目の憤怒が戦乱をまきおこす
 荒れ狂う党派のはざまの争いに
 正義の声はかき失せる
 悪徳が無恥にも我が世を謳歌し
 無礼なる横暴、聖なるものを汚辱し
 国々の基たる錨、解き放つ
 —— かかるもの、歓喜の歌の種ならず

されど、敬虔に羊の群れを追い守り
 足るを知り、他の財など羨まぬ民が
 堪忍できぬ暴虐を打ち払い
 激怒しても人間性を敬い、
 幸運勝利にても分に安ずる

—— こは不滅にて、歌謡にふさし
かかる劇、喜びて君に見せん
君そを知らん、すべてが偉大、君がものゆえ³¹

前詩節はフランス革命を、後のはこの詩と共に贈った『テル』の文学的世界を表している。この詩もナチスの手にかかれば、これはフランス革命とは違う無血で平和的にヒンデンブルク大統領から権力の移譲を受けた 1933 年の我々の革命に献じられたものとなるが、これまで述べてきたように、それはシラーの立場とは明らかに異なっていよう。このテルとシラーの時代には普通選挙制度はなく、ヒトラーはあったそれを権力獲得後は廃止したということからも正反対である。では具体的にこの作品を見てみよう

伝説と歴史、詩人と現実

この作品の主な素材になったのは二人の著書である。その一人は年代記作家エギーディウス・チューディ (Ägidius Tschudi 1505-72) で、彼は『スイス年代記』(Chronicon Helveticum 2 Bde. 1734-36) の中に「テル伝説」を史実として組み込み、その彼の仕事をもう一人の歴史家ヨハネス・フォン・ミュラー (Johannes von Müller 1752-1809) が前者を基本的に、その誤りまで受け継ぎ、『スイス連邦史』(Geschichten der Schweizerischen Eidgenossenschaft, 5 Bde. 1780-1808) を書いていた。

このスイスの「テル」はデンマークの「トコ伝説」に由来しているようであることが現在では分かっている。この北欧の伝説は 12 世紀のデンマークの歴史家ザクソ・グラマティクス (Saxo Grammatikus 1150 頃-1200 初め) によって書き残されているが、それによるとこのトコは弓の名人で、狙った的を外したことがないことで有名になっていた。その自慢話をハーラル・ブラータン王が耳にし、彼に「お前の息子の頭に載せたリングを撃てみる」と命じた。彼はそのとき 3 本の矢をえびらから抜き、手にとって、見事それを射抜いた。王が他の 2 本の矢は何のために抜いたのかと問うと、「もし最初の矢が息子に当たってしまったら、それで王様を討つつもりでした」という答えが返ってきた。その後トコは命がけのスキー滑降を命じられ、その腕前も証明し終えたとき決心し、王の息子スヴェーノのクーデターに加わり、森の中でその王を射る³²。この 12 世紀に書きとめられたデンマークの伝説は 15 世紀のスイスに伝わっていたが、それを 16 世紀の年代作家と 18 世紀の歴史家は史実として書きとめてしまった。

かつて歴史学の教授であったシラーはこの素材を前にして、1802 年 9 月 9 日づけで友人ケルナー (Christian G. Körner 1756-1831) に宛ててこう書いている。「それで、ぼくはチューディのスイス史の勉強を始めているんだ。そしてようやく分かってきたんだが、この著述家は邪気のないヘシオドスのような、それどころかほとんどホーマーのような精神を持っているので、詩的な気分にさせてくれるんだ。—— このテルときたら、筋は時と所の観点から見れば全くばらば

らで、帽子とリンゴのメルヘンを除けば、ほとんどドタバタ時代劇で、ドラマ化にはそぐわないんだが、それでも今まで懸命に歴史的なものとつまみ出し、詩的なものに入れ込もうと、あれこれ頑張ってきたんだ。ところでぼくは君に、こいつは嫌な仕事だ、なんて言うつもりはないよ。(中略) とても高度で詩的な要請を満たしてやろうという気がぼくにはあるからね。局地的に限定された一つの国民全体と遠い昔の一つの時代全体、そして重要なことは、全く局地的でほとんど個別的のといって良いような各々の出来事、これらに最高の必然性と真実性という特徴を与え、ご覧に供してみせることなんだ。その建物の柱をうち立てて、しっかりした建築に完成させたいと思ってるんだ」³³。

この手紙から読みとるべきことは、次の3点であろう。歴史学者であったシラーはここで、「テル伝説」を他の様々な歴史的事実とは違った「メルヘン」と見抜いていること、そしてチューディの歴史的伝記から「テル」とだけ固有名詞を上げているところから見ると、この時すでに彼を主人公にし、そこから古代ギリシア的英雄叙事詩をドラマというジャンルに改・創作しようとしていること、さらにばらばらな「時と所」で起こった色々な個別的な歴史と伝説の諸事件を、観客にこれは「必然」で「真実」だと思わせるような、緊密で詩的な筋に統一しようとしていること、以上の3点である。シラーは明らかに「筋、時、所」の三統一の法則を意識しているが、もちろんアリストーテレス (Aristoteles BC 384-BC 322) の『詩学』をフランス経由で輸入したゴットシュート (Johann C. Gottsched 1700-66) 流ではなく、それを批判して「筋」の統一を優先させたレッシングを受け継いでいる。では歴史と伝説をどのように「必然と真実」性で編まれる一つの筋にシラーは仕上げたのだろうか。

この観点から完成した『テル』を見れば明らかである。前述の二人が書いた歴史書に従って、この舞台となったシュヴィーツ、ウーリィ、ウンターヴァルデンの三州に先祖が住むに至った由来、そして皇帝をも恐れず自由と自治権を保ってきた歴史、これが彼らの誇りとともに登場人物たちの台詞に組み込まれている。所についても同じように、この三州から遠く離れたヴィーンの宮殿での出来事や、1808年にロイス川のほとりでアルブレヒト国王 (Albrecht, 在位 1298-1308) が暗殺された事件も登場人物によって生きいきと報告され、この劇の背後の大きな建築物を構成する柱となっている。このようにして過去の歴史の「時」と遠く離れた「所」が凝縮され、1306年ウンターヴァルデンとシュヴィーツ州を分ける湖の岸で幕が開き、1308年ウーリ州にあるテルの家前で幕は下りる。この約2年間は何百年という歴史に比べれば短く、所はすべてその3州の内では閉じている。この州の合計面積約2500km²は愛知県の約半分、狭いとも言えるが、これは私たちの700年ほど前の出来事で、その頃は村ごとに閉じた生活をしていたはずで、隣村との交流などほとんどなく、特にこの地はアルプスの高い山や湖によってそれが阻まれている。シラーにとって彼の500年ほど前の時と、彼の訪れたことのないスイスの山岳を緊密な一つの筋に束ねることは大変なことであつたであろう。それを可能にした一つがスイス3州が団結してオーストリアからの独立を達成するという歴史的視点で、これが『テル』を大きく一つにまとめている。シラーは各州の代表となってその独立運動をまとめる役を担う次の3人に焦点を当て

ることによって、ばらばらな所をぐっと緊密化させている。ヴァルター・フルストはウーリ州の長老でその役を担うことになるが、彼の名前はチューディの著書に出てくる名で、あの歴史家ミュラーによってテルの義理の父とされている。この彼の家にウンターヴァルデンの若者メルヒタールが代官の追っ手から逃げて来てかくまわれている、ちょうどそこにシュヴィーツ州の代表となるシュタウファハーが昔のよしみで訪ね、代官どもの無法にたいする相談を持ちかける。これが第 1 幕第 4 場で、このたった一場で各州での代官による人民抑圧の情報が交換され、それに対する方策を決めるため各州から 10 名ずつ代表を敵方に察知されない寂しいリュートリの地に集めようということになるが、肝心な「いつ」という「時」は決められていない。集会のためには「いつ」、「どこで」、「だれが」、「なんのために」が必要だが、その最初の「時」がカットされているのはシラーの芸術的トリックで、この 2 年間という長く緩やかな時の流れを観客に意識させれば、筋の緊密化が緩んでしまうからであろう。この劇で唯一決定的な「時」として観客に意識されるのは、第 2 幕第 2 場のリュートリでの代表集会で決められる 3 州人民の一斉蜂起時期、すなわち「主の祭り」³⁴という表現でのクリスマスの日だけである。あの二人の歴史家の「12 月の終わり」という曖昧な記述をシラーは理想の新時代を拓くにふさわしいもの、すなわちクリスマスと具体化したのであろう。しかし、このリュートリの代表会議で論争になったのは蜂起をすぐに実行するか、適当な時期に延期するかということで、敵の城を襲撃するのに有利な条件を備えているのが偶然その日であったというだけで、観客にはその日までとその後の物理的時間経過は意識されず、筋の緊密化が保たれることになる。

このようにシラーは筋の緊密化に心を砕いていたのだ。そして、テルは「代官ゲスラーの帽子に礼をこばみ、捕らえられ、リンゴを射るように強いられ、舟で城に連行される途中で逃げ出し、その代官を討つ」という記述しかない伝説上の人物であるが、この彼にシラーは妻ヘートビヒと二人の息子ヴァルターとヴィルヘルムとの家庭生活をいとなませ、さらに全 15 場の劇の 8 場にまで登場させ、他の場でも人々の会話に彼の活躍や消息をのぼらせ、現実的歴史に深く介入させている。しかし、ロビンフッドのような単なる英雄にもせず、現実の歴史的独立運動からは距離を置かせている。しかし、テルは決してアウトサイダーではない。では、シラーはテルをどのように形象しているのだろうか。

最初の場に登場するテルは、こう形象されている。きこりのパオムガルテンはウンターヴァルデン州の代官ヴォルフエンシーセンの陵辱から妻を守るため、斧で彼をたたき殺してしまい、その追っ手から逃げてきたが、目の前に大きな湖が立ちふさがり逃げ道を失う。そこで彼は助け舟を見つけ、自然の嵐から舟を守ろうと陸に引き上げている漁夫のルーオディに向こう岸に渡してくれるよう頼むが、それは無謀なことで、家には守るべき子もいるからと断られる。そこにテルが通りかかり、漁夫はこれ幸いと「テルも舟を操るから、漕ぎ出せるかどうか、おれの証人になってくれる」(135) と彼に応援を求める。ところがその彼の意に反して、やるべきだ、と言われ、「正気なら (bei Sinnen) 誰もそんなことできない」(138)、「今日はジーマンとユード」(146) の厄日だからと迷信まで持ち出して拒否する。テルは舟頭を説得しようと「しっかりした

(brav) 男は自分のことを最後に考えるものだ」(139)などと試みるが、自分の命の安全を優先する彼は「舟はそこで、湖はあっちだ。お前がやってみろ」(142)などと拒絶し続ける。追っ手が迫って来たので、テルはバウムガルテンを向こう岸に渡そうと、嵐の中に漕ぎ出し、それに成功する。

この場に居合わせた牧夫のクオニと獵師のヴェルニは職業柄第三者となることができ、舟の専門家である漁夫のルーオディに助けるよう促し、テルが登場すると一緒にテルの応援をする。皆にそうするよう追い詰められ、漁夫は専門家として不可能で無理なことを示し、ときには迷信ぶりをさらけ出し、またはまだ社会的に生きている迷信を保身のために利用する。彼らは普通の社会人である。ところがテルは迷信などとは無縁で、そしてさらに重要なのは、前述したカントの定言的命令にそのまま従って行動する啓蒙主義の化身である。漁夫のルーオディの台詞を「正気なら」と訳したが、原文は>bei Sinnen<で、>Sinn<の複数3格が使われている。これは元来「感覚」とか「意識」という意味で、人間は視聴覚などの5つの感覚をとおして外界を意識する。ルーオディはその5感をとおして嵐を認識し、自分と家族の安全のために、バウムガルテンを助けることを拒否するが、この彼は職業的経験から得られた自然科学に忠実で、さらに社会福祉とか労災保険制度のない当時の社会的環境から判断できる正しい「感覚・意識」をそなえて(bei) いると言えよう。つまり彼は「しっかりした」まともな男である。この私の日本語訳だけでは、この両者のやりとりは原文どうりに理解できないだろう。テルの言葉の「しっかりした」にあたる>brav<を、独和辞典にある「ちゃんとした、まともな、誠実な、手堅い、勇敢な」などに置き換えても、事態は変わらない。独々辞典を引いてもその日本語訳に似た単語>tüchtig, wacker, tapfer<が目につくが、ザンダースの辞書に>gehörig; so, wie es sein soll<³⁵「ふさわしい、そうであるべき様」という説明もある。では「ふさわしく」、「～であるべき」それとは何か、これをその第1幕第1場での二人のやり取り全体からみれば、テルは漁夫のルーオディとは違う次元にあることが分かる。彼はルーオディらの「感覚、意識」的次元ではなく、「彼岸と此岸の利益を考えずに、人間としてなすべき規範、すなわちカントの定言的命令という人倫の次元で行動する人間である。テルはルーオディとは違う、そういう次元の「しっかりした男」なのである。それゆえ彼は妻への伝言を牧夫のクオニにこう頼み、小舟に飛び込む。「同郷の人よ、もしおれに何かあった時は、女房をこう慰めてやってくれ。どうしても放っておけないことをおれはやったのだ、と」。(158f.)

それゆえテルは「メルヘン」的・啓蒙主義の化身であるといえよう。テルが漕ぎ出すと、追っ手の一隊が湖岸に着き、逃してしまったことを知り、仕返しに残っていた彼ら3人の家畜や小屋を襲い、破壊する。その乱暴狼藉に彼らは困惑し、あの漁夫ルーオディの「正義の神よ、いつこの国に救い主を下さるのでしょうか」(180f.)という台詞で、この第1場は終わる。この3人の職業は山で狩をする獵師、家畜を飼う牧夫、湖の魚を捕る漁夫であることから、彼らは当時のスイスの全産業を担う人民の代表として舞台に上げられていると言えよう。その彼らはここではオーストリアの暴力に対抗しない他力本願の人民である。

化身と試練

第 3 幕第 1 場で、テルのこの危険な冒険を入づてに聞いた妻のヘートビッヒは「助かったのは奇跡よ。あなたは妻や子のことを本当に全然考えなかったの」(1526ff.) と怒りをぶつける。それに答えて、テルは「なあお前、おれはお前たちのことを考えたさ、だからその父を救ってやったんだ、彼の子どもたちのためにな」(1528f.). 現実的なヘートビッヒにとって他人の子と自分の子は別で、それぞれ個性性であるが、テルにとって他人は自分と同じもので、特殊性である。こういう特殊性の世界に啓蒙主義の化身は生きているのである。カントの倫理規定を忠実に守れば、実生活の場でテルは非現実的にならざるをえない。彼は燃えさかる家の中に自分の赤ちゃん置いてきてしまったからと、飛び込んでいく母親に似ていよう。この母親はその赤ん坊と同化しているのであって、彼女の赤ちゃんは自分自身である。このお母さんと同様テルは人倫とか愛情の観点から見れば美しく正しい人といえようが、現実的には危険を背負っている。それを咎めてヘートヴィヒは「荒れ狂っている湖で漕ぐなんて、神様を信じているのではなく、神様を試すものですよ」(1530f.)³⁶ と夫を批判する。ところが「神は自らを助けるものを、助ける」という言葉もある。この両極端な言葉は具体的な場面では止揚できない矛盾である。テルはこの矛盾を超越している特殊な存在だから、神を試してはいない。彼は「代官の暴力からおれはお前を救ってやるが、嵐の暴威からは違うお方が助けてくださるに違いない」(155f.) と舟に飛びこむ。この後半部分は一見「神を試している」ようにも読めるが、それは人間的弱さから結果として起こることで、すぐ次に続く妻に対する言付けを頼む台詞がそれをよく表している。「おれに何か人間的なこと（弱さから起こる死——引用者）が起こったら、女房をこう慰めてくれ。どうしても放っておけないことを、おれはやったのだと」。明らかにテルは、全能の神と違う弱い人間としてカントの定言的命令を自らの自由意志で果たしただけである。

このテルについて、シラーはイフラント (August W. Ifflant 1759-1814) にこう書いている。「テルは作品のなかでかなり自立・律 (für sich) しています (steht) し、彼の件 (Sache) は私的な件 (Privatsache) で、こういう状態は終局で公的な (öffentlich) 件 (Sache) と噛みあうまで続きます」³⁷。この > für sich < は「公的な件と噛みあうまで続く」のだから「単独行」と訳しても良いだろう。しかし後述するように、彼はリュトリの会議に代表として参加していなかっただけで、代官ゲスラーを討つという仕事を果たし、「公的な」件に深く介入していることも確かである。化身の彼にとっては公的な件も、私的なものにしか見えないだけである。もちろんシラーはこれを暗示的にしか描写せず、「メルヘン」と歴史の関係を曖昧にしているが、この > für sich < は、啓蒙の哲学者カントとの関係から今一度考慮すべきであろう。

自然科学的に扱われる対象である物 (Ding) は「即自」(an sich) であるが、人間はそれと違って、感覚界に留まるのではなく「対自」(für sich) できる存在である。すなわち自らに對自し、自らを反省し、感覚的「快」を追い求め「苦」を避けるという自然的世界から脱し、あの

道徳律を自らの意志で受け入れることもできる。カントはこの聖と俗から自立し自律できる人格からなる社会である「目的の国」(Reich der Zwecke)を実現しようと哲学したのであり³⁸、シラーはそれを芸術という「影の世界」(das Reich der Schatten)である『テル』によって、その国づくりに詩人として貢献しようとしているのではないだろうか。それゆえテルはその舞台に自立・自律した人物として立たなければならない。

こういう視点から見れば、第1幕第1場の特殊なテルにとって、他人であるバウムガルテンの件(Sache)は他人事ではない同じ人間としての「私的な件」となり、小舟で向こう岸に渡してやるべき(Sollen)である。ゲスラーの掲げた帽子に敬意を示さなかった件で番兵に逮捕されようとしているとき、これは自分の件だから、「おれ自身できつと自らを助ける(下線 引用者)」(1846)と彼は人々の助けを断わる。テルは、獵師という職業で彼らと同じ人民であるが、その獵師の姿は仮身で、魂は啓蒙主義の化身である。第4幕第3場でゲスラーに「テロ」行為を働くときも、「貧しく純真な坊たち、貞節な妻、これを家来に囲まれた代官の怒りからおれは守ってやらねばならぬのだ」(2577f.)と、暗殺理由に個人的な件だけを挙げている。皇帝を暗殺したバリチーダを「不幸なおかただ、あんたは自分の野心から出た血なまぐさい罪を、一人の父親の切羽つまつての正当防衛と一緒にしても良いのですか」(3174f.)と咎め、自分の「テロ」を私的なものに限定し、スイス独立運動との関係には全く触れていない。

こういうテル役俳優には、こう演じてくれるようシラーはシュヴァルツ(Karl Schwarz 1768-1838)に1804年3月24日づけで書いている。「この役はもちろんこうなります。この役を演ずる者は高貴でありながら単純で、落ち着いて控えめな力で、その舞台上でのジェスチャーは大げさではないが意味ありげで、平然とした演技で、大仰でないが力のこもった、高貴で素朴な男らしさの究極となります」³⁹。シラーの俳優に対するこの要請を見ると、まさにその挙動からは古代ギリシアの英雄ヘーラクレス(Herakles)の姿が彷彿し、台詞からは啓蒙主義の化身の精神が聞こえないだろうか。シラーはこういうテルを14世紀初頭のスイス三州の歴史的現実立ち向かわせたのである。ところで、こういう化身の主人公は、例えば『オレルアンの乙女』のように、人間に課せられた悲劇的運命を克服し、人間としてより高い段階へと成長できるであろうか。悲劇で終わるためには例えば、リングを射る場面で人間的弱さを露呈し、子どもにその矢が当たってしまい、その場で代官に呪いのような挑戦状をたたきつけて、自殺ではない逮捕のほうを選択するレッシングの『エミーリア・ガロッティ』のような父親にならなければならないだろう。それでは伝説の弓の名人テルに反する。啓蒙主義の精神を実現するためには、王侯も含めた人間一般をより高い段階に成長させることが重要であって、その完成者といわれるレッシングはそれを『ハムブルク演劇論』で説き、悲劇的結末に向かうにつれ成長してゆくエミーリアの姿を描き、ゲーテも『ファウスト』(Faust 1832)で主人公を人間として最高の段階へと自己発展させた。しかし、この名人テルは化身として登場させられているため、舞台上では弱い人間の運命を受け入れられず、成長もできないが、その代わり、試練に立たされ、それを克服するという道を辿らざるをえないのではないだろうか。

ヘーラクレスはゼウスの妻ヘーラが課す 12 の試練を次々と克服する。彼はシラーの「影の世界」(Das Reich der Schatten 1795) では最後に神々が住むオリュンポスに昇天し、ゼウスとヘーラの間に生まれた娘ヘーベと結婚することになる。では、テルはどうか。彼はこの劇中で 三つの試練を体験しているといえよう。第一の試練についてはすでに述べたと思われるので、簡単にまとめるに止めよう。困っているバォムガルテンと同化し、人間としてカントの定言的命令を実行した。これは他人事として放っておけない啓蒙主義の英雄テルに課せられた試練である。

第二はリンゴを射る場面での試練である。そこに至る帽子の場面までは前述したとおりである。ここで興味深いことは、その前にシラーは三人の番人にかなり長い台詞を与えていることである。そこでは自分たちの「案山子」番のような馬鹿げた任務を嫌がっている心情が告白され、そして牧師レッセルマンが通行人たちを守るために行なった機知、すなわち彼がわざわざ帽子の前に立って、聖餅を置いて鈴をチリンチリンと振ると、人々はその前でひざまずいたという話が紹介される。そしてその番人は「彼らはその聖餅台を拝んだのであって、この帽子じゃなかったんだ」(1750f.) と自分の仕事が馬鹿にされていること、そしてそんな仕事を与えた代官に腹を立てている。この牧師の機知で、日本での同じような話が思い出される。江戸時代のキリシタン弾圧に抗して、仏壇の後方にキリストとマリアの像などを隠し、幕府の役人の視覚では目のまへの仏を拝んでいるように見えるが、心ではその後ろの神に祈っていた隠れ信者がいたという。この二つは人間の心をそのように支配しようとする者に抗する人民の知恵を表していよう。しかしテルはその人民とは違って、つねに「正当なことをしているから、どんな敵も恐れはしない」(1544) のであって、そういう精神的に「高貴で素朴な男」、すなわち啓蒙主義の化身として、そして古代的英雄として舞台に上げられている。それゆえ、この帽子の件も試練の一つに数えることができるかも知れないが、次のものとは比較の対象にならないほど小さい。

帽子に礼を尽くさなかった咎から、代官ゲスラーのいじめのような命令により、テルは自分の息子の頭上に載せたリンゴを射らねばなくなる。テルは第一の試練でバォムガルテンを嵐のなかに漕ぎ出し救ったが、この第二の試練は、リンゴという的をはずせば自分も子どもも助からないし、自分の腕が少しでも震えれば矢が息子に当たるかもしれないというものである。つまり、その的を射抜くしかないというものである。ところがワナワナと弓を引き絞る「手は揺れ、ひざは振るえ」(1982) ガクガクという状態である。80 歩むこうの木の下で父親を自慢に思い、信じている息子が「とうちゃん、射って、ぼくこわかないよ」(1991) と催促する。ゲスラーは武装した多くの家来に囲まれているから、その彼をいま討っても、彼の従者に親子ともどもすぐ復讐されてしまう。あの前述のヴェルネが見逃したこういう状況下で⁴⁰、彼は短くたったの 2 音節で「エス・ムス」(Es mus. 1991) とだけ言い、えびらから第二の矢を取り出しチョッキに隠し、最初の矢を弓につがえ、射る。主語の「エス」は二人とも助かるには、射るしかないという先述したすべての状況であり、事態である。「ムス」は「強制する」という動詞で、いくら自由にあこがれ自立しているテルでも逃れられない「必然」である。これは先に引用したレッシングの「人間は強いられたいけない」という言葉にも、自由意志で従えというカントの定言的命令に

も反するものである。これを原文の1音節より1つ多いだけの3音節で「やるぞ」と訳せば、テルの決意とか意志になってしまう。そうならないよう訳せば「やるしかない」と、3倍の6音節で訳さなければならない。このリング射ちも試練であるが、第一のものとは違い、親が子どもに向かって矢を放たねばならないのだから、ここに自由意志は全くない。

最後の大きな試練はそのゲスラーを待ち伏せし、彼の心臓をめがけて矢を放つときである。あのように親子の情をもてあそぶ悪代官は滅びて当然と思われるだろうが、その命を取る、しかも自分がそれをするとなると全く別問題となる。あの第二の試練では、的はあくまでリングだったが、今度は人間の心臓である。キリスト教徒も信じ守るべきとされていたモーゼの十戒の一つは「汝、殺すなかれ」である。イエズスは一人も殺さず、人間の罪を背負って昇天したと『新約聖書』にはある。前述したように、カントも君主に対する暴力的反抗はもちろん、殺害など以ての外としていた。フランス革命は国王をギロチンにかけ、市民同士で殺し合いを始めている。これらに対するシラーの批判と新しい答えがこの場に創作されているのではないだろうか。この第4幕の最終場にテルはその作者シラーの分身として、さらに啓蒙主義の化身として古代の英雄の姿で登場し、最後の試練を受けるのだろう。

では代官殺しはどのように正当化されるのか。これをまず証明してくれるのは前幕第3場の漁夫で、「代官が生きているかぎり、お前さんの安全はない」(Vgl., 2274f.)と、正当防衛が第三者によって認められる。だが他人がどう言おうと、その行為者個人の気持ちとその自由意志が最も重要であろう。そのため第4幕第4場ではこれまで台詞はごく短くしか与えられていなかったテルがここでは急に多弁になり、90詩行にものぼるモノローグが始まる。その最初の詩節では、確実に狙撃できるよう選んだ場所の特徴が観客に知らされる。それは縦に一人ずつ通るのがやっとという谷間に沿った狭い小道で、上の岩の茂みに姿を隠して討てば射程距離も十分で、ゲスラーのお供の騎士たちも道の狭さに阻まれて、その犯人テルを追うのが難しいという好地点である。そして、ゲスラーに対する命令形で「代官、神の審判を受けろ。おまえは逝かなければならぬ。おまえの命数は尽きた」(2566f.)という台詞が続く。もちろん代官がそうなるようにするのはテルだから、これは彼の「そうしてやるぞ」という決意である。この最初の「神の審判を受けろ」の直訳は「おまえの勘定を神と締めろ」である。「勘定」とは商人が客とか取引先との関係を帳簿につける貸し方と借り方、つまりプラスとマイナスであるが、その相手が神になると、神の前で代官はこれまでの人生の総決算をするため、天秤の両皿にこれまでの善行と悪業を左右に分けて載せてゆき、善行のほう为重ければその皿は下がり天国行きとなるが、逆は地獄行きと、最後の審判が下る。全知の神の前ではもちろん誤魔化しは利かない。ところで、この代官はテル以外に対しても様々な悪業を重ねてきたはずである。そうでなければスイスの独立運動は歴史的に起こらない。ところがテルにそう決意させたものは、以下で述べるように、すべてテルの私的な事ばかりで、あのイフラント宛の手紙にあったとおりである。

次の詩節はこう始まる。彼は人には危害も加えず静かに暮らしてきた。弓で狙ったのは森の動物ばかりで、「人殺しなど思いもしなかった」(2570)。そんな温和な獵師にテロを決意するまで

に変えたのは代官で、「子どもの頭に向けて腕前を賭けた者なら、その敵の心臓を射抜くこともできる (kann)」(2575f.) となる。この「誰でもできる」は「誰でも」という意味の三人称の主語と「できる」(kann) という可能性を表す動詞で、だから自分も「できるはずだ」と自らの決意を励ましていると言えよう。そして次の詩節では、子どもと妻を代官から守ってやらねばならない (mus) という父として、夫としての義務が語られる。そして、あの「やるしかない」という状況下で、「心の中で、神 (Gott) だけが聞いていた恐ろしい誓いをたて、次に射る最上の的はおまえの心臓にしてやるぞ (sollte) と誓ったのだ——あの地獄の苦しみの刹那に自分に課した神聖なその責務をいま果たしてやろう (will)」(2584f.) と、彼の意思が表明される。ここで重要なのは、神は聞いていただけで、重点はテルが自分にそれを誓っていることで、彼は神からも自立し、自分の意志で自己に課した責務を果たそうとしている。

次の詩節でも最後に「神」という言葉が出てくるが、まずは世俗のことから始まる。「お前はおれの主人で、おれの皇帝の代官だが、その皇帝だってあのようなことは許されなかっただろう」(2590ff.) と、テルの従うべきお上は代官と皇帝がいるが、その二人は差別化されている。「あのように残虐を楽しみながら、悪業を次々と積み重ねてくれたのだから、処罰なしでは済まないぞ。罰を与え、復讐する神 (ein Gott) がいる (lebt) のだ」(2593ff.) と宣言される。前詩節のあの「神」は無冠詞で、キリスト教は一神教だから、当然これは固有名詞というべき「神」であるが、これには不定冠詞がつけられている。「いる」ととりあえず訳したが、この > lebt < は「生きている」という意味である。もちろんこの > lebt < だけで神を人間にできると強弁するつもりはないが、その前の不定冠詞と重ね合わせ、ここのテルの台詞全体から考えれば事情は異なっていく。すると、この「神」には王権神授による皇帝が該当するかもしれないが、ここでは「神に代わって」ゲスラーに「復讐」しようとしているテルとなろう。ここでテルは「皇帝」または「神」に代わる存在にまで精神を高揚させ、人間として犯してはならない殺人を決意する。そして、これはカントの啓蒙主義をのり越えた化身となったことを表している。次の詩節では、これまで自分の腕の一部ようになっていた矢を、しかも一本だけ残っていた最後の矢を筒から取り出し、ゲスラーを的にと弓に装着してやり (will, 2599)、弦にはそれがしつかり的に当たるようにしなってくれと力づける。これで失敗の許されないテロの準備が整い、彼の決意も頂点に達した。あとは的のゲスラーが現れればよいだけである。

ところが次の詩節で、テルの決意に異変が起きる。その的を待ちながら道ゆく種々様々な人々を観察していると、皆それぞれ擦れ違っていくが、その彼らはよそよそしく (fremd)、他人の痛みなど気にもしていないことに気づく。狭い道だから、道を急ぐため追い抜くにも、対抗者とすれ違うにも、多少ぶつかったりするだろうが、他人のことには無頓着なよそよそしい社会の縮図をテルはそこに見抜いたのだろうか。そういう道行く者たちは商人、巡礼、修道士、芸人で、さらに陰鬱な顔をした盗人までもいる。彼らは自分の仕事のことだけを考えながら、自分の道を前にまえにと進んでいく。ここまで来てテルは自分のことに気づき、「おれの仕事は人殺しだなのだ！」(2621) と叫ぶ。これには感嘆符がついている。そして彼は道の端に旅人の休憩用に据

えられている石のベンチに「座る」とだけト書にあるが、思うに、<がっくり>と腰を下ろすの
 だろう。利己的な商人・犯罪者である盗人、こういう「よそよそしい」族は、他人の困窮を自分
 の件と考えているテルにとって異質の者たちであるが、「殺人」犯ではない。ところが自分のし
 ようとしていることは、まさにその嫌悪すべきことである。それに気づき、これまで固めてきた
 自分の決意を反省（für sich）し、さらに先ほどの旅人のよそよそしい人間関係に触発され、そ
 れとは反対のものを思い浮かべたのだろう。次の詩節では父と幼い子どもたちとの具体的な光景
 が描写され、少し考えたことを表すダッシュの後、本題に入っていく。

なあ坊や、いつもお父さん（der Vater）が出かけ、
 また来きたときは、お前たちはうれしがっていたよな、
 いつも家には、お前たちに何かをもって、帰ったからな、
 アルプスのきれいな花とか、めずらしい 2625
 鳥とか、アンモナイトの化石とかだったよな、
 こんなのは、山を歩けば、見つかるんだよ——
 いまお父さんは（er）違う獲物を追っかけてきて、
 荒れた道にすわって、敵の命を
 取ろうと、待ちぶせてるんだ。 2630
 —— だがな、坊や、思うのはお前たちのことだけだよ、
 罪のない、かわいいお前たちを守り、暴君の復讐から
 守りきろうと、ずっと今も待ちつづけ、
 そいつを殺そうと、お父さんは（er）弓を引き絞るのだ（will）！

この台詞も感嘆符で終わっている。前の詩節もそれで締められていたが、それまでの詩節で語っ
 てきた内容に愕然として、がっくり力が抜け、座りこんだのだろう。そこまでの詩節では、テル
 は「おれ」という一人称で「妻子をお前の怒りから守るため」（Vgl., 2577f.）という夫と父の義
 務、そしてリンゴの場面の復讐を誓ってきたが、ここでは「お父さん」と訳した原文は >der
 Vater< とそれを指す代名詞 >er< で、どちらも三人称である。拙訳にはその二箇所しか出てい
 ないが、原文の >er< は 7 つで、合計八箇所もある。テルは三人称になって、子どもたちに語っ
 ている。「おれ、おれ」という一人称の自己を捨て、客観的にそれまでの自分を第三者の精神的
 な目で見つめなおし、反省し（für sich）、新しい啓蒙主義の境地を拓いたのではないだろうか。
 あの第 2596 詩行の、「神」（ein Gott）に代わってゲスラーに復讐するという誓いは、ここでは
 逆に「暴君の復讐からお前たちを守る」に変わっている。行為そのものは同じであるが、テルと
 いう主体の内容がさらに昇華され、「弓を引き絞るのだ！」と感嘆符がつけられ、主語の意志
 （will）が強調されている。そして彼は力強く立ち上がる。次の詩節は「私の狙うのは上等な獣
 だ」（2684）で始まり、主体としてのテルは一人称で表されるが、新生した主体になったのであ

ろう。そして逆にこれまで二人称であったゲスラーのほうが三人称にされ、「すごい値打ちもの」(2642),「私を滅ぼそうとする不倶戴天の敵の心臓」(2643),「この山中で最良のもの」(2649f.)という語で表される。これまで人間とみなされ、「お前」と呼ばれていたゲスラーは単なる三人称になってしまったのだから、弓を引き絞るテルの腕はもはや震えることはないだろう。

そこに婚礼の行列がやってくる。それを機に畑の番人をしているシュテュシとの会話が始まり、その彼に対するテルの応答は短く、意味深長である。これはこれからテルがやろうとしていることを示し、それが観客には分かるが、シュテュシには世間話の普通の応答としか聞こえない。シュテュシの「そうだな、のんきに自分の畑を耕し、家族と暮らすのが幸せというものよ」(2680f.)に依じて、テルは「いくらおとなしい者だって、隣に悪い奴がいて、そいつに気に入られていないとなると、無事では済むまい」(2682f.)と、ゲスラーがここでも三人称の悪い隣人に普遍化されている。

ゲスラーが馬に乗って登場し、その彼の前で子どもを連れた貧しい女が狭い道を立ちふさぎ、捕らえられた夫を帰してもらうまで、ここを動かないと嘆願する。彼は「女、道を空ける、さもないと馬でお前を踏み潰して通るぞ」(2763f.)とおどすが、女は子どもたちともども身を投じ、ますます通れなくしてしまう。怒り狂った彼がまさに馬を進めようとした瞬間、一本の矢が彼の心臓に突き刺さる。ゲスラーは「テルの矢だ」と叫び、落馬する。テルは岩の上に姿を現し、「お前には討った者が分かったろう、他を捜さんでよい。自由だ、民の家は。安全だ、無実の者は。お前にはこの国を害すことはもうできまい」と言い残し、消える。

リンゴの場では「ご主人様」(Herr),「あなた」(ihr)と呼んでいたゲスラーがここでは「お前」(du)となり、支配者はいなくなった。テルという私人の射った最後の一本の矢はあの身を挺して嘆願していた女と子どもたちも救ったのであり、彼のこの最後の台詞にある「民の家」(Hutten)は「小屋」(Hutte)の複数形である。「無実の者」(Unschuld)も「無実」という抽象名詞のため文法的には単数形になっているが、意味はもちろん複数のそういう「者たち」である。何よりもこれまで人民に危害を加えてきた支配者が消された「この国」(Land)という言葉が全体を表している。しかし、化身のテルにとっては複数の全体も私的なことであり、第5幕第2場でパルリーダに対して、私的な「一人の父親の切羽つまつての正当防衛」であったとシラーはテルに言わせている。ではイフラント宛に書かれた手紙にあった「私的な件」が「公的な件と噛みあう」のはいつになるのだろうか。

未完

注

- 1 Vgl. Peter-Andre Alt, Schiller in 2 Bdn., Verl. C. H. Beck, München 2. Aufl. B. 2. S. 565.
- 2 Schillers Werke, Nationalausgabe, Hermann Bohlaus Nachf. Weimar (この全集からの引用は NA. と略し、巻と頁数を以下のように記す) B. 40-1. S. 177.
- 3 Börses Werke in 2 Bdn., Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1986. B. 1. S. 210ff.
- 4 Otto Fürst von Bismarck, Gedanken und Erinnerungen in 2 Bdn., J. G. Cotta'sche Buchhandlung

- Nachfolger, Stuttgart und Berlin 1905. B. 1. S.19.
- 5 "Theater heute 08/9-07"では2007年の8から9月の期間に2劇場で上演されることを知らせている。この期間はウアラウプという夏休みを含み、さらにこの年はその作家の生誕後250年などと記念する年でもないことを考慮すると、この作品への人気が衰えていないことを表していると考えられよう。
 - 6 正式名称は Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei (国家社会主義ドイツ労働者党) で、これでは長すぎるので下線部の頭文字をとった NSDAP が略号として用いられることもあるが、現在ドイツでは本文で記したように最初の一語が普通用いられている。なお、日本で通用している「ナチ」(Nazi) とその複数形である「ナチス」(Nazis) は蔑称であるが、ここでは簡略のためをも兼ねて、それを使用する。
 - 7 ドイツで本書は発禁で原書には到達できなかったので、『わが闘争』平野・将積訳、角川文庫の昭和53年8刷発行のものを利用した。207頁参照。
 - 8 Vgl. Jwan-François Bergier: Wilhelm Tell, übers. v. Josef Winiger. List Verl. München u. Leipzig 1988. S. 418. 本文中にあるブラウン(茶色)はナチスの制服の色を表す。
 - 9 NSGは文脈から Nationalsozialistische Gemeinschaft の略号と解して、「国家社会主義共同体」と訳するのが適当と思われるが、私の所有する辞書にこの略号は載っていない。唯一1996年発行の Bertelsmann の Die neue deutsche Rechtschreibung にその略号を見つけたが、Naturschutzgebiet (自然保護地域) と説明され、この文脈では明らかに違う。
 - 10 Georg Ruppelt, Die Ausschaltung (des) Wilhelm Tell (im Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft, Hrsg. von F. Martini - W. Müllerseidel - B. Zeller, 20. Jahrgang Alfred Kröner Verl. Stuttgart 1976. S. 404.
 - 11 本文中では理解を可能にするため「新体制に合うように」と補足したが、この Gleichschaltung にはもう少し説明が必要であろう。前述のように1933年ナチスは政権をとると、同年の「等制法」によりこれまでのものを国家社会主義的に合わせようと努力した。シラーの劇を前述したように、都合の良いものに改作するのもその一環であった。
 - 12 注10に同じ。
 - 13 Ebd. S. 404f.
 - 14 その最初の通達は1941年6月3日付けで帝国指導部 (Reichsleiter) マルチン・ボルマン (Martin Bormann) から帝国大臣ラマース (Lammers) にこう宛てたものである。「シラーの劇『ヴィルヘルム・テル』をもはや上演しないように、さらに学校でも利用しないようにと、そう総統は望まれています。これについて大臣ルスト (Rust) と大臣ゲッベルス博士に通達してくださるようお願いいたします。ハイル・ヒトラー」 Ebd. S. 407.
 - 15 Ebd. S. 418f.
 - 16 Richard von Weizsacker: Reden des Bundespräsidenten, Corso bei Siedler 1985. S. 21.
 - 17 DDRでは国民の文化的生活を守るために、パンなどの食料品や演劇とコンサートなどに補助金を多く出し、低料金に抑えていた。それらを大量に買い入れ、西側に持って行って売られてしまえば、経済的混乱が起こり、国民はその益に浴することができなくなる。
 - 18 生産と経済の環を支える人材が家族と共に西側に逃亡すれば、工場の歯車の幾つかが突然欠け、教室では日ごとに空席が目立つという事態になる。そして周りには動揺が起ころう。もちろんこれは資本主義でも起こる。従業員に他の会社に突然移られたり、病気や自殺によりベルト・コンペアーのある部署を担当すべき人材が突然欠けたりすることなどである。しかしDDRの場合にはいわば小さな民族大移動のようなものが起こりうる状況で、それはベルリーンの壁の崩壊後の状態がよく示しているといえよう。
 - 19 両ドイツは地理的に東西対立の最前線で、DDRには多くのソ連軍が駐留していた。そのため『テル』は反ソ劇にもなり、危険なものであったろう。
 - 20 この詳細については拙論「„Wir sind ein Volk“—シラーの『ヴィルヘルム・テル』の歴史的役割—」

参照。「研究報告 16」ワイマル友の会, 1991 年 5 月 1 日発行, 42-49 頁。

21 注 16 に同じ, S. 20.

22 シラーを狭い「国民詩人」と位置づけるアップシュの『シラー』が版を重ね, 1984 年にはその第 8 版が出ている。その『テル』の節の書き出しはこうである。「『ヴィルヘルム・テル』と共にシラーは、歴史の大きな素材を扱いながら、そしてその国民を具体的に観察しながら、円熟した芸術家の技能を尽くし、国民を民族的に解放する戦いに向かった」(S. 317, 下線は引用者)。さらにこの節のある章のタイトルは「民主主義的国家の詩人」(S. 317) と題されている。この引用後の () 内の数字は次に示す原書の該当頁。Alexander Abusch: Schiller, Aufbau-Verl. Berlin u. Weimar. 8. Aufl. 1984.

23 Helmut Brandt: *Der bleibende Schiller*, Weimarer Beiträge Heft 11. 1985. S. 1788.

24 Vgl., NA. B. 10. S. 386.

25 この引用は注 23 の文献にすべては含まれていない。ブランドのこの講演を印刷したものを、その彼が 1989 年 来日するのに合わせて、彼の業績を日本語で公表しようと、当時愛知県立大学教授であった可知正孝氏に手渡されたオリジナルにはある。その出典と頁数は『Freidrich Schiller/Angebot und Diskurs』Hrsg. v. Helmut Brandt, Aufbau-Verl. Berlin u. Weimar 1987. S. 27. その全訳を担当した拙訳はワイマル友の会東海支部編「ヘルムート・ブランド：シラー、ハイネ、ブレヒト論」の 3-26 頁。

26 これはナチスの時代にシラーの『ドン・カルロス』上演中に起きた次の事件を暗示しているのだろう。ベルリーンのドイツ劇場で、ゲッベルスとシュトレッサー臨席のもと、この作品が上演され、ポーザ侯爵に扮する俳優バルザーが第 3 幕第 10 場で国王フィリップ役に向かって「思想の自由を与えたまえ」と言うと、拍手喝采がとつぜん湧き上がり、長く続いた。その後観客は街頭に繰り出し、まるで示威的な色合いを帯び始め、結局シュトレッサーはその騒動を静める役に就かざるをえなくなった。

27 Norbert Oellers, *Schiller*, Reclam. Stuttgart, 1993, S. 73.

28 「過去に目をふさぐものは、現在にたいして盲目になる」。注 21 に同じ。

29 『賢人ナータン』(Nathan der Weise) の第 1 幕第 3 場で、友人であるイスラム教の托鉢僧がスルタンに雇われて、「正しくなくても」仕事だから「しなければならぬ」と言ったことに対する台詞。Gesammelte Werke, Aufbau-Verl. Berlin u. Weimar, 1968. B. 2. S. 339.

30 ゲスラーのその帽子にこめた意図は「背を曲げさせる」(Vers. 2719f.) ことである。

31 NA. B. 2-1. S. 179.

32 Vgl., Friedrich Schiller Erläuterungen und Dokumente, Reclam Stuttgart 1969. S. 45f.

33 NA. B. 31. S. 160.

34 NA. B. 10. S. 190. Vers. 1400. もちろんこの他にも時を特定できる表現はある。第 2943 詩行には「皇帝が殺害された」とあり、これはハーブスブルク家出身のドイツ皇帝アルブレヒトで、彼が甥のヨージン・バルチャーに暗殺されたのは 1308 年 5 月 1 日、第 146 詩行には「今日はジモンとユダの日だ」という漁夫ルーオディの台詞から、1306 年 10 月 28 日となる。ここでも筋の内容として重要なのはそういう物理的な「時」ではなく、前者ではスイス侵略の最高権力者が死んだということ、そして後者ではルーオディは迷信を信じていて、嵐の湖に人命救助の舟を出さないということである。

35 Daniel Sanders, Handwörterbuch der deutschen Sprache, Verl. von Otto Wigand 1878. S. 136.

36 『新約聖書のルカ伝』第 4 章第 10-12 節、同じくマタイ伝の第 4 章第 11-12 節を参照。

37 NA. B. 32. S. 89.

38 大橋精夫、島田豊著『近代的世界観の転回』青木書店、1970 年発行、第 7 刷 302-326 頁参照。

39 Ebda., S. 118.

40 Vgl., Bornes Werke, BDK. B. 1. S. 213. ここでベルネはこう書いている。「父親というものは自分の子の命と交換なら何でもできるが、子の命そのものと交換には絶対できない。(中略——引用者) テルもその命令に従わないか、それともその暴君をしとめるべきだったのに」。